

第80号    (50円)

昭和57年7月25日

内容

全体を見る眼と歴史家たち……1~3  
 第119回大学共同セミナー……2~4  
 昭和56年度教育プログラム白書……5  
 千人会……6  
 寄付金報告……6  
 法人ニュース……7~8  
 事業部だより……8~11  
 わたしたちの合宿……9  
 昭和56年度業務白書……10~11  
 利用状況……11~12

# セミナー・ハウス

## SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

〈所在地〉

東京都八王子市下柚木(☎192-03)  
 電話 0426-76-8511~3  
 振替口座 東京 5-74590番

編集

大学セミナー・ハウス

企画室

編集人・中川秀恭 発行人・岡山猛  
 製作 中央公論事業出版

「歴史は歴史家の数だけある」という古い言葉がいみじくも言い表わしているように、われわれが対象としている歴史は、一つの客観的な実在であるわけではなく、どのように過去を読もうとするかによって、さまざまなかたちでわれわれの前に立ち現れてくる。このような観点に立ちながら、ここで「全体を見る眼か」を二つの側面からお話してみたい。

第一には、現代における学問状況の問題である。人間の知的活動は、ルネッサンス期における普遍的な形の形態から徐々に分化し、法律学、政治学、経済学、社会学、等々の学問を生み出した。近代の学問は細分化によって、対象を限定し方法を精緻に研ぎ、その基礎を確固たるものにしたと言つてよい。歴史学についても、事情は同様であり、一九世紀以降、歴史研究は、専門分化を通じて、その学問的基礎を固めたのである。しかし、今日しばしば指摘される

とおり、近代の学問の極度の専門化は、研究のタコツボ化を生み、世界を問いたですという学問本来の機能を失わせている。

第二は私自身の個人史にかかわるが、私は、戦後の歴史学の展開の中で、経済史の領域から仕事を始め、土地制度史を中心にアンサン・レージュムを研究の対象としてきた。その後、一七世紀末のブルターニュ地方に起こった農民一揆の研究に取り組むこととなったが、それまでの経済史の研究を通じてつくり上げてきた歴史のイメージでは、時代の現実に基づく生身の人間の行動である農民一

揆の真の姿はつかまえられない、という気持を強く抱くようになった。これが私自身の研究過程における一つの転機となったが、さらに付言すれば、一九六八・六九年の「大学紛争」もまた、現代における学問とは何かを根底から問い直す形で、新しい歴史認識へと向かう契機となったのである。

ところで、今日の歴史学が直面している問題を考えるに当たっては、その根底にある科学観あるいは歴史観が問題とされねばならない。一九世紀のフランスで次第にその基礎を固めてきた実証主義的歴史学は、自らを科学として確立

していく過程で、歴史事実を個人の主観と無関係な客観的実在として捉え、史料、とりわけ文書史料を手がかりに客観的事実をひとつひとつ正確に確定することが科学的な歴史研究であると考へた。

このような歴史観が徹底していくと、歴史は個々バラバラな事実の集積としか捉えられなくなる。史料は多くの場合、個々の事実の間にもどのような因果関係があるかを述べてはいないからである。実証主義的歴史学の逢着した閉塞状況は、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて強い批判をひき起こした。フランスの人文地理学やデュー

ルケム学派の社会学がそれであるが、歴史学の領域における、いわゆるアナール学派も、このような近代の学問批判の中から生まれたのである。「史料は己を空しうして読み取らねばならない」と言つたフステル・ド・クラランジュに対し、マルク・ブロックは「史料は問ひかけねば答えてくれない」と言い、リュシアン・フェーヴルも同様に、「問題を提起し、仮説をたてることによってこそ史料は何事かを物語る。歴史事実とは、われわれ研究者から切り離された純客観的存在ではなく、常に主観と客観の間にある」と言つ

た。ここに、実証主義的科学観からの訣別を見ることができよう。

このような歴史観に立って、彼らが歴史のうちに読み取るうとしたものは何か。リュシアン・フェーヴルは、「われわれが歴史のうちに見ようとしているもの、それは他ならぬ生きた人間たちである」と主張し、さらに「人間はどんな部分でつかまえてもよい。しかし、頭でも手でも、どこを引くばろうと、生きた人間ならば身体全体がそれについてくる」と論じて、歴史学の求めようとしているのは生身の全的な人間であること

を強調したのである。

それではアナールの歴史家たちは、歴史的现实をどのようにして全体的に捉えようとしたのだろうか。第一の特徴は、歴史的现实を政治史のレベルでのみ捉えていた伝統的歴史学に対し、人間のつくり出した歴史にはさまざまなレベル、次元があることを強く主張した点にある。そして、これら多様な次元の間には、階層秩序を設けることなく、すべての次元を相互連関的に捉えるべきことを主張する。その意味で、彼らの考え方は、決定論的な歴史把握と対立する。

第二の特徴は、歴史的時間は人間によって「生きた」時間であり、単線的な物理的時間ではないという、歴史的時間の多様性の主張である。フェーヴルの後継者フェルナン・ブローデルは、歴史的時間を短期・中期・長期の三つの波長でとらえることを主張し、従来の歴史学は短期的変動に眼を奪われ、底にひそむより長期の波動に眼を向けていないと批判する。具体的な歴史分析の中で、これらの多様な波動を捉えるために、かれらは時系列史 (Histoire sérielle) という方法を生み出した。

初め経済史の領域で、物価史や生産量の変動の分析というかたちで具体化されたこの方法は、やがて心性の歴史のレベルにまで適用されるようになり、アナール派の歴史学の大きな特徴となった。

こうした多様性を踏まえたアナール派歴史学の第三の特徴といえるのは、多様な歴史の成層、多様な歴史的時間の相互連関の中か

ら、われわれが歴史のうちに見ようとしているもの、それは他ならぬ生きた人間たちである」と主張し、さらに「人間はどんな部分でつかまえてもよい。しかし、頭でも手でも、どこを引くばろうと、生きた人間ならば身体全体がそれについてくる」と論じて、歴史学の求めようとしているのは生身の全的な人間であること

ら、われわれが歴史のうちに見ようとしているもの、それは他ならぬ生きた人間たちである」と主張し、さらに「人間はどんな部分でつかまえてもよい。しかし、頭でも手でも、どこを引くばろうと、生きた人間ならば身体全体がそれについてくる」と論じて、歴史学の求めようとしているのは生身の全的な人間であること

ら、われわれが歴史のうちに見ようとしているもの、それは他ならぬ生きた人間たちである」と主張し、さらに「人間はどんな部分でつかまえてもよい。しかし、頭でも手でも、どこを引くばろうと、生きた人間ならば身体全体がそれについてくる」と論じて、歴史学の求めようとしているのは生身の全的な人間であること

ら、われわれが歴史のうちに見ようとしているもの、それは他ならぬ生きた人間たちである」と主張し、さらに「人間はどんな部分でつかまえてもよい。しかし、頭でも手でも、どこを引くばろうと、生きた人間ならば身体全体がそれについてくる」と論じて、歴史学の求めようとしているのは生身の全的な人間であること

ら、われわれが歴史のうちに見ようとしているもの、それは他ならぬ生きた人間たちである」と主張し、さらに「人間はどんな部分でつかまえてもよい。しかし、頭でも手でも、どこを引くばろうと、生きた人間ならば身体全体がそれについてくる」と論じて、歴史学の求めようとしているのは生身の全的な人間であること



### 全体を見る眼と歴史家たち

東京外国語大学教授  
 二宮 宏之

ら、われわれが歴史のうちに見ようとしているもの、それは他ならぬ生きた人間たちである」と主張し、さらに「人間はどんな部分でつかまえてもよい。しかし、頭でも手でも、どこを引くばろうと、生きた人間ならば身体全体がそれについてくる」と論じて、歴史学の求めようとしているのは生身の全的な人間であること

ら、われわれが歴史のうちに見ようとしているもの、それは他ならぬ生きた人間たちである」と主張し、さらに「人間はどんな部分でつかまえてもよい。しかし、頭でも手でも、どこを引くばろうと、生きた人間ならば身体全体がそれについてくる」と論じて、歴史学の求めようとしているのは生身の全的な人間であること

ら、われわれが歴史のうちに見ようとしているもの、それは他ならぬ生きた人間たちである」と主張し、さらに「人間はどんな部分でつかまえてもよい。しかし、頭でも手でも、どこを引くばろうと、生きた人間ならば身体全体がそれについてくる」と論じて、歴史学の求めようとしているのは生身の全的な人間であること

ら、われわれが歴史のうちに見ようとしているもの、それは他ならぬ生きた人間たちである」と主張し、さらに「人間はどんな部分でつかまえてもよい。しかし、頭でも手でも、どこを引くばろうと、生きた人間ならば身体全体がそれについてくる」と論じて、歴史学の求めようとしているのは生身の全的な人間であること

ら、われわれが歴史のうちに見ようとしているもの、それは他ならぬ生きた人間たちである」と主張し、さらに「人間はどんな部分でつかまえてもよい。しかし、頭でも手でも、どこを引くばろうと、生きた人間ならば身体全体がそれについてくる」と論じて、歴史学の求めようとしているのは生身の全的な人間であること

# 第119回 大学共同セミナー

## 主題——ヨーロッパ中世と現代

——歴史家とともに——

期日——昭和57年5月21〜23日

### △全体講義▽

全体を見る眼と歴史家たち

東京外国語大学教授

二宮宏之氏

### △セクション演習▽

A 過去の「心性」をいかに再現

するかマルク・ブロックとその後継者たち

東京外国語大学教授

二宮宏之氏

B 「われらを生みしわれらの先祖たちを賛えん」—アイリ

ン・ペウアの中世史研究—

聖心女子大学教授

三好洋子氏

C ヨーロッパ中世の成立とイス

ラーム・ピレンヌの歴史研究を

中心として—

D 「文化史」と「国制史」—ド

ブシュとブルンナー—

一橋大学教授 山田欣吾氏

E 中世史研究と現代—ヘルマ

ン・ハインベルと上原専祿—

一橋大学教授 阿部謹也氏

△運営委員▽

一橋大学教授 阿部謹也氏

△参加学生▽46名(内女子18名)

一橋大(9)、東大(8)、早大(4)、

津田塾大、ICU、中大(各2)、

慶大、武蔵大、共立女子大、立大、

東京学芸大、京大、都立大、筑波

大、東京外国語大、学習院大、明

星大、横浜国立大、専大(各1)、

その他(6)、合計19校

開講式のなかで、本セミナーの運営委員である阿部謹也氏から、セミナーのテーマについて、次のように説明があった。

中世史研究は、現在ヨーロッパにおいても、日本においても大きな転機をむかえている。日本史における網野善彦、横井清、笠松宏至、勝俣鎮夫各氏の諸研究やマルク・ブロック、リュシアン・フェールからフェルナン・ブローデル、ジャック・ルゴフにいたるフランスのアナール学派の新しい研究動向、そしてドイツにおける構造史の試みなどはいずれも歴史研究の対象をただでなく、研究の方法そのものにおける根本的な転換の可能性をふくんでいる。

古文書の分析に基づき、いわゆる「文献史学」が、「新しい歴史学」に転化しうるかどうかはいまださだかではないが、そこに大きな展望が開かれつつあることは確かである。

このような動向を目にするとき、ともすると研究視角の斬新さに惹かれて「新しい歴史学」が、すでに誕生しているかに考えられがちであるが、歴史研究の営みは、それほど簡単に転換しうるものではなく、数十年の年月をかけて徐々に変わってゆくしかないのである。

本セミナーの主旨は、歴史研究

の新しい動向を紹介しながらも、それをただ事柄の新鮮さにおいて示すことではない。新しい研究分野を切り開いてきた歴史家たちが、それぞれの時代と社会のなかでどのような生活を送り、その実生活のなから、どのようにして新しい研究の緒をつかんでいったのか、という点について歴史家に即してとらえることである。

歴史研究が、歴史家の営為から切り離されて論じられがちな今日、歴史研究者の現代に生きる姿とその中世史研究とのかかわりをみることによって、新しい歴史学の可能性について考えてみたい。

◇ プログラムは、開講式につづき、「全体を見る眼と歴史家たち」と題する二宮宏之氏の全体講義から始まった。講義の概要についてはフロント・ページに詳しく紹介したので参照していただきたい。

講義のなかで氏は、「全体を見る眼を維持しながら、部分部分をおさえていくというかたちでしか『全体』をつかまえることはできないし、それ以外に『全体史』というものはない。全体史というものは、永遠につくりええないものだ。全体史をにらみながら、複眼的アプローチをどこまでも積み重ねるという作業が歴史史にあるだけだ」ということを強調された。氏の講義は、本セミナーのプログラムの深層部分を形成するものとして、最後まで参加者の脳裏をとらえて離さなかった。

全体講義のあとは、大学院セミナー館をはなれ、食堂いき、先生と学生は歓談しながら夕食をとった。夕食後は、各セミナー室に

### (1ページからつづく)

ら、社会的、文化的アイデンティティを持った歴史的個体がどのようにして形成されるかを捉えようとする点にある。フェーヴルは、フランシュ・コンテという一地域を舞台にそれを捉えようとしたが、ブローデルはそれを地中海世界にまで広げ、歴史的アイデンティティの形成をそこに読み取るようとしている。

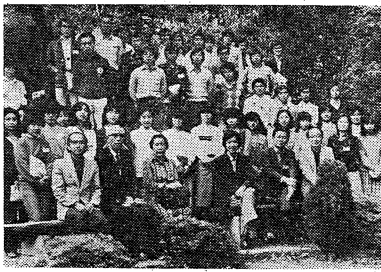
このような全体へのアプローチの模索を、マルク・ブロックの『封建社会』の篇別講成を手がかりにして考えてみることにしよう。まず第一巻第一部では環境が取り上げられるが、そこでは舞台としての大地とそこに登場してくる人間集団が考察され、生活条件(物質的状況)と心性(精神的状況)の両面から、そこに生きた人間たちがおさえられている。次いで第二部では、人間たちがどのような紐帯によって結ばれているかが扱われる。第二巻では以上の相互依存関係の中からどのような社会集団が形成され、どのような政治社会が生み出されてくるかが検討されている。この作品においてブロックは、全体史なるものを理論的に構成しようとしたのではないが、このような篇別構成は、彼の全体へのアプローチの仕方を示して、きわめて示唆的である。

私自身も、次のような形で、歴史分析の参照系を考えてみたいと思っている。まず出発点として、「からだ」と「こころ」の複合体としての人間を置くのだが、第一には、「からだ」を座標軸にして、身体としての人間をとりまく諸条件を検討する。自然環境、気候の

長期変動、人口動態、生活環境、疾病、性などの多様な問題が、「からだ」との関連において浮かび上がってくる。他方、今度は、「こころ」を座標軸として、心性のさまざまな様相が相互に関連づけられてくる。この際「こころ」は「からだ」に密着した形で捉えることが肝要であり、またとくに行動様式のうちにその現れを見る必要がある。中世においては、懼れ・祈り・反逆といった「こころ」の形が目されるが、さまざまな心性の発現形態を通じて、人の時間意識・空間意識・集団意識が解明されなくてはならない。

このように「からだ」と「こころ」から出発し、その上で、これらの人々を結び合わせる社会的絆の問題に至る。それぞれの時代、それぞれの社会に固有な社会的結合関係のあり方が問われねばならないからである。さらには、このような社会的紐帯がいかにして、人間集団において支配・従属の関係を生み出すかが問われることになる。このような参照系を設けることを通じて、全体を見る眼を具体化していこうというのが、私の意図したところであった。ここで問題にされているのは、「全体史」なるものをアプリオリにつくり上げることで全くない。敢えて言うならば、「全体史」なるものができ上がってしまったたんに、全体を見る眼は死んでしまうのである。そして歴史家にとって大切なのは、「全体史」ではなく、全体を見る眼なのだ。

このような観点に立った歴史学は、人間諸科学の交流から多くを学ぶことができるし、また学ばな



中世史研究の苗床  
——第119回大学共同セミナー——

わかれて、第1回めのセクシオン  
演習が夜おそくまで続けられた。

◇ 二日めの午前中は、昨夜に続き  
各セミナー室にて演習を行ない、  
昼食のあとは、大学院セミナー館  
に集まり、「中世ヨーロッパの民  
衆生活」についてのスライドを鑑  
賞した。2時間あまりにわたり、  
三好洋子氏は、イギリスの『時禱  
書』に残っている「労働の暦」  
(各月ごとに農民生活を描いたも  
の)の図柄を中心に、その他教会  
にある折りたたみ椅子の裏側に彫  
られている図柄などから、当時の  
農民生活をいきいきと語られた。

上映のあと、参加者から、当時  
の農民の服装はどのようなもの  
であったのか、三面ヤヌスの図柄は  
何を意味しているのか、『時禱書』  
は何に利用されていたのかなど、  
さまざまな疑問がだされた。ヨー  
ロッパ中世へのアプローチは、ド  
イツ、フランス、イギリス、ベル  
ギーなど参加者によってまちまち  
ではあったが、ヨーロッパのど  
の地域でも、キリスト教会を中心  
に同じような庶民生活がみられた

のではないかと、そういう意味で、  
ヨーロッパ中世はひとつのコスモ  
スを形成していたのではないかな  
ど、参加者の想像力をかきたてる  
スライドの数々であった。

交友館でティ・タイムをとつ  
たあとは、ふたたび大学院セミナ  
ー館に移り、阿部・二宮・三好・  
佐々木・山田各指導教授を中心に  
シンポジウムが行なわれた。各指  
導教授と参加学生の自由な論議が  
かわされたが、なかでも「中世」  
の時代区分とその根拠についての  
質問とそれに対する各氏の回答  
は、歴史を学ぶ者に、あらためて  
歴史家の生きざまと歴史研究の密  
接なつながりを考えさせる結果と  
なった。

◇ 三日めは、本セミナーの総括と  
して、9時半より11時半すぎまで  
およそ二時間にわたって全体集會  
が行なわれた。そこで中心となっ  
た論点は、次の二点であった。  
ひとつは、過去に生きた人々の  
「心性」を再現するための方法、  
もうひとつは、過去の史料をま  
えにしての歴史家の態度について  
である。実は、これらの問題は、  
19世紀以来の実証主義歴史学に対  
して、今日の歴史学がいかにある  
べきか、という問題でもあった。  
初日の二宮氏の全体講義がふたたび  
議論の中心として浮かびあがっ  
てきた。

山田欣吾氏は、ブルンナーやド  
プシュの全体史と地域史の關係に  
ふれて、次のように語った。「わ  
れわれ(生活者)は、身の回りの  
ことについてはすべてにわたり興  
味をもっている。しかし、広い地  
域については限定されてくる。：

だから、見渡せる狭い地域に対  
象を絞って、そこにあらわれてく  
る史料を隈なくさがし、全体をと  
らえる」という発想が両者にはあ  
る、と。

こうしたドイツの歴史家の考え  
方に対して、二宮氏から次のよう  
な意見がだされた。ドイツの歴史  
家はモデルを作成したうえで、構  
造を認識する。つまり、彼らが  
△全体史▽という場合、これが  
のエレメントがあって、それらが  
組み合わせられてひとつの構造がで  
きる、そしてそれが全体である、  
というように考えている。しか  
し、それでは「閉ざされた構造」  
になってしまいくるのではないかと

「歴史に入っていく扉はひとつで  
はなく、無数にある。歴史家はそ  
れらの扉を次々に開いていかなけ  
ればならない」と、フランスの歴  
史家がいう「全体を見る眼」と  
は、全体をひとつのモデルで認識  
するというような閉ざされた全体  
ではなく、次々に歴史の扉を開い  
ていくなかで「全体」を見ようと  
することなのである、と。

さらにそれに対して、二宮氏の  
いう「開かれた全体」とはどうい  
うことか、歴史事象を認識する場  
合に、モデル構成を行なうことが  
なぜ「閉ざされた全体」になっ  
てしまうのか、という疑問が参加者  
からだされた。  
二宮氏は次のように返答した。  
フランスの歴史家のあいだには、  
ひとつのモデルを想定して全体に  
迫るという方法では、歴史は死ん  
でしまう、という危機感がある。  
歴史を生きたものとして捉えるた  
めには、なるべく閉ざされたモデ  
ルで捉えないほうがよい。しかし

ければならないだろう。歴史学を  
「人間諸科学の四つ辻」と呼ぶの  
は、単なる修辭の問題ではない。  
さらにまた、このような歴史学  
は、新たな史料学を必要とするだ  
ろう。実際、新しい歴史学は、多  
様な図像資料に注目し、生活の日  
常態を明らかにするため新しい考  
古学の援けをかり、口承資料をも  
大幅に活用する。このような試み  
は、文書史料から何が明らかとな  
るかを問うことに自らを限定して  
来た伝統的歴史学の発想に対し、  
歴史的现实に全的に迫るためには  
何が判らなくてはならないかを問  
うところから、不可避となった試  
行錯誤なのであった。歴史学は、

同時に、モデル構成ということ  
を自覚しつつ、一步一步と歴史の扉  
を開いていかなければいけないの  
ではないか。中世社会とはこうい  
うシステムである、という具合に  
ひとつのモデルに固執すると全体  
に迫るうとした意味が消えてしま  
うのではないかと。

中世史研究の方法にはじまり、  
現代の学問論にまで発展した討論  
は、時間の関係でひとまず打ち切  
られたが、ここで提起された問題  
は、参加者の今後の課題として残  
された。歴史家たらんとする学生  
ばかりか、広く学問するものにと  
って、現代における生き方が問わ  
れたセミナーであった。ヨーロッ  
パ中世の研究としては、現代日本に生  
きるわれわれ自身への問いかけに  
はかならなかつた。  
中世史への関心が高まっている  
なかで、『中世の窓から』が第8  
回の大仏次郎賞をうけるなど、そ  
の業績が高く評価されている阿部

その論証においてはあくまでも嚴  
密でありつつ、その問いかけにお  
いてはどこまでも大胆でなくては  
ならないからである。

この問いかけにおいて、ことさ  
らに全体を見る眼を強調するのは  
何故か。それが現代の学問状況を  
内より克服しようとする企てであ  
り、それが現代を真に生きようと  
する者の自己回復の営みであるこ  
とは冒頭に述べたが、全体を見る  
眼の復権こそが、現代を批判し克  
服する視点をもたらすものである  
ことを、再度確認しておくこと  
しよう。

(第119回大学共同セミナーの全体講義より。  
文責・編集者)

氏には、セミナー全体にわたりご  
尽力いただいたことをここに付記  
しておきたい。

◇ 歴史家の個性

東京大学大学院博士課程西洋史専攻  
河原 温

今回の共同セミナーにおける主  
題の一つは、ヨーロッパ中世史研  
究の現状を踏まえて、過去をいか  
に再現するかということであつ  
た。その点で私には二日めの全員  
参加によるシンポジウムでの質疑  
応答が、最も興味深く、かつ刺激  
に満ちた時間であった。アナリ  
学派の歴史家たちの試みをはじめ  
とする新しい歴史学に係わる概念  
装置——たとえば、「全体(史)」、  
「構造」、「伝統社会」等——を  
めぐる学生側の熱心な質問、そし  
てまた、こうした質疑応答の中で、  
各セクシオン演習を担当された先  
生方のそれぞれに個性的な「中

世一観が提示されたことが、とりわけ印象深い。

歴史家によって再現される過去の映像は多様である。その映像をいかに定着させるか。歴史家の個性は、彼の生きた時代の中で磨かれ、鋭くされるものだろう。その点でセクション演習で取り上げられた歴史家たちは、全体集会での報告からも察せられたように、それぞれの道を卓抜な精神をもって歩んだ人々であった。私もそうした歴史家の個性に、CセクションでのH・ピレンヌの生涯の検討を通じていささかなりとも触れたように思う。ピレンヌをめぐるとの演習に参加した人たちの専攻は、西洋史ばかりでなく法学、インド哲学、美術史、思想史等広い学問分野にわたっていただけに、八時間を越す演習の中で「ヨーロッパ中世」を超えて諸学全般をめぐる議論にまで発展したこともまた楽しい記憶である。

(Cセクション参加者)

凝縮された大学生活

清見女子大学56年卒

笹野美穂

共同セミナーへの参加は今回が初めてであり、しかも衝動的に思いついたため準備は不十分であったが、三日間の収穫は予想をはるかに上回るもので、知的関心をかきたてられたのはもちろんのこと、多くの新しい友人もつくることができた。

かつて私は、学問の価値をその社会還元を求める立場から、ヨーロッパ中世史を学ぶ者として、ヨーロッパのしかも中世という時代がどのように日本の現代社会に持ちこまればいいのか、あるいは持ちこまれるべきか、考えてきた。それゆえこのセミナーのテーマに寄せる興味は大きかったのである。また私は、歴史を扱う際の概念の枠の問題で立ち往生していたが、セクション演習の折に、ブルンナーがすでにそれについて具体的な試みを行っていたことを知り、感

激した。ブルンナーが中世的史料用語をそのまま使って全体を把握しようとしたことは、二宮先生の全体講義にも積極的に関わってくる。学問には「分析」から「総合」へ、「総合」から「分析」へという二つの方向が絶えずあって、一つの運動を形成していると思うのだが、「全体」とは「分析」に対する「総合」のことなのであろうか。いづれにしても、客観的な歴史像から主體的な歴史への転換が必要であらう。

今年大学を卒業しながら幸いにも自由な時間を与えられ、このような場に飛びこんだのであるが、閉鎖的な大学生活に行き詰まっていたことも、きっかけの一つであった。事実真剣に学問に取りこんでいる、あるいは何らかの示唆を求めている同世代の人々に出会ったことは、最大の喜びであった。すばらしい出会いにはすばらしい場が必要であることをつくづくと感じた次第である。また、討議のレベルの高さには終始圧倒されていたが、さらに印象的であったのは、その迫力である。高校、大学

と女子校で過ごした身には、トーンも低く真剣この上ない発言者の表情を間近にする時、まさにそれは圧巻であった。ぐいぐいと引きこまれ、気づいた時には私自身が発言者となっていた。机の下で両手両足を震えていたのを覚えている。あるべき大学生活が凝縮されていたような三日間であった。

(Dセクション参加者)

学問する態度

早稲田大学商学部四年

古川英一

大学の掲示板上に、今回のセミナーの案内が貼ってあったのを目に留めたのは、申込み締切りも間近に迫った頃であった。テーマは僕の関わっている分野とはまったく異なっていたが、徒らに長く大学にいながら「学ぶ」という主体的行為をほとんど放棄してきた僕にはある種の焦りがあった。学問それ自体を追求することもできず、かといって全然学問に背を向けることもできない曖昧な状態に苛立ってもいた。そこで僕はこのセミナーに参加することで学問に対する自分なりのアプローチの糸口を見つけようと考えた。そこがまず他の参加者の方々と異なっていたと思うし、それ故に、果たして高度に専門化された課題についていけるのだろうかという自分の無知からのためらいももあった。

二泊三日のセミナーは二宮先生の全体講義で始まった。先生は歴史を全体的に見る眼について話された。それは極度に細分化された——学問の発展過程には必要ではあるが——学問が学問本来の機能を果たさなくなっている状況への警鐘でもあったと思う。全体講義を終え、僕は阿部先生の演習に参加。僕のような門外漢がどこまで喰いついていけるか、といささか緊張したものの、やがて僕は非常にくつろいだ気分だ。演習室にいる自分に気づいた。阿部先生の話は読書論あり、先生の学問的遍歴ありで課題から脱線気味ではあったが親しみやすく、それでいて妙に考えさせられてしまうものであった。上原専祿とH・ハインベル、この二人の歴史家の生き方を追求することによって歴史を学ぶ姿勢、つまり先達の生き方を学ぶことで学問を把握していく態度を僕は知った。また演習後お酒好きの先生を交えて交友館でもたれたコンパも楽しかった。

中世を学ぶからには、多くの歴史研究の集積を通して、中世の人の姿が浮かび上がってこなければならぬと思う。歴史は何よりも有機体としての人間の黙々とした営みなのだから、ブリューゲルが描いた中世の農民たちの姿はいきいきと僕らの眼前に中世を照らし出す。そのような形で中世の歴史を考えていくこと、それを今回出席された先生方は御自分に課しているように思えた。だからこそ中世をほとんど知らなかった僕の中に、中世の像が浮かんで来たのである。二泊三日、僕は駆け足で中世を旅することができた。そして我流ではあるが、学問へのアプローチ方法も、うすぽんやりと掴めてきたようだ。

(Eセクション参加者)

寄贈図書

57年4~5月

「留学生相談室・室報」4号 大阪大学文学部

「波動力学形成史」 江沢 洋殿

「扱一憲法の解明」 齊藤 寿殿

「中国学入門」 田所義行殿

「安楽死論集」第6集、笠原正成殿

「制度と階級」 笠原正成殿

「教員採用試験・問題の解答・解説・対策」58年版 谷敷正光殿

「中世都市」ヨロップ世界の誕生「歴史家アンリ・ピレンヌの生涯」 佐々木克己殿

「アジアの友」1~3月 アジア学生文化協会殿

「金融経済」193号 金融経済研究所殿

「日本女子大学社会学部」五十年史」 一番ヶ瀬康子殿

「早稲田社会学部研究」人文自然科学研究一合併号 早稲田大学社会学部学

「本屋敷古墳群発掘調査概報」I 法政大学文学部考古学研究室殿

「歪んだコンピュータ」電子計算機と人間「リーダーデイス革命」「石油戦争」他四冊 石田晴久殿

「世界の中の能」 法政大学能楽研究所殿

「宗教と文化」8 聖心

「女子大学キリスト教文化研究所」国際協力」5・6月号 国際協力事業団殿

「Asian Culture」[「Asian Book Development」] 4 エネスコ・アジア文化センター殿

「中世に生きる人々」三好洋子殿

「一般教育学会誌」第4巻第1号 香川大学教育学部殿

昭和56年度 教育プログラム白書

昭和56年度は、大学共同セミナー(五回)、大学院共同セミナー(一回)、大学合同セミナー(二回)、国際学生セミナー(一回)、大学教員懇談会(一回)を実施した。表1にみるように、総合計\*一〇回が当ハウスの開催した教育プログラムの全容である。昭和55年度までは「大学共同セミナー白書」として、大学共同セミナーの年間実施分について分析してきたが、56年度から企画室が全面的に国際学生セミナーを所轄することになったのを契機に、「教育プログラム白書」と改題し、統計資料には大学教員懇談会を除いた九回分を合算することにした。

\* この他に、国際シンポジウム「ヨーロッパから見た中国とその国際環境」(3月23日)が開催されているが、国庫補助案件による年間計画に含まれない日帰りのプログラムであったため、この表には記載しなかった。

まず、参加者総数は表2①にみるように五三三名を数えた。ただし、大学合同セミナーは、参加の形態がおのおのの大学のゼミを主体としていることから、まったくの個人参加による他のプログラムと区別するため、その参加者数を内数で表記した。なお、各回平均の参加者数を大学共同セミナー五回分についてみると(大学院共同セミナーは企画の主旨からいっても、参加の対象としていた母集団からいって)、小規模とならざるを得ないので、大学合同セミナーとともに除いて算出した。六二名となつて、企画立案の基準にして

いる定員七〇名をわることになり、今後の課題となるところである。

次に、大学数は国立一九校、公立二校、私立三九校、短大三校、合計六三校となり、55年度より若干増えて、地方の大学からの参加も目立った。参加者の多い上位の大学は早稲田、東京、慶応、法政、東京女子の順となるが、大学合同セミナーを除いた場合、その順序は早稲田、東京、慶応、東京女子、上智、立教となる。因みに上位三校はここ数年、顔ぶれも順位も変わっていないのが興味深い。

表2②は所属学科で参加者の専門分野をみたものであるが、人文、社会、自然の各領域にわたっており、とくに自然科学一八・八%というのは、これまで最も高かった一八・二%を上廻る数字であり、自然科学の領域を含んだ学際的なテーマの比重が高かったことを示している。また、表2③によつて学年をみると、三年が三二%と最も高く、従来と変わらないが、本年の特色は、四年生が減少した分だけ大学院生が増加したことである。これは、統計に大学院共同セミナーを加えたことにもよるが、学年の分布を教養課程(一、二年生)と専門課程(三年以上)に分けると、前者は二二%(五五年度六一%)となり、後者六七%(55年度六一%)となり、大学院共同セミナーが発足した54年度に比較しても後者の比率が高くなつており、共同セミナーが高学年にアツ

ピルしていることは否定できない近年の傾向であろう。

なお、男女の比率は五九対四一となり、相対的に差がなくなつてきている。

<表1> 昭和56年度教育プログラム開催状況

▶大学共同セミナー

Table with 5 columns: 回数, 期間, 主 題, 指 導 教 授 名, 参加人員. Rows include 第114回(1) through 第118回(5).

▶大学院共同セミナー

Table with 5 columns: 回数, 期間, 主 題, 指 導 教 授 名, 参加人員. Row: 第2回.

▶大学合同セミナー

Table with 5 columns: 回数, 期間, 主 題, 指 導 教 授 名, 参加人員. Rows: 第2回, 第3回.

▶国際学生セミナー

Table with 5 columns: 回数, 期間, 主 題, 指 導 教 授 名, 参加人員. Row: 第8回.

▶大学教員懇談会

Table with 5 columns: 回数, 期間, 主 題, 指 導 教 授 名, 参加人員. Row: 第18回.

○印は全体講義・ゲスト講演の指導教授、ただし◎印はセッション演習の指導教授を兼ねる。\*印は運営委員を兼ねた指導教授。( )内は運営委員。

〈表2〉昭和56年度 教育プログラム参加状況

(計9回：第114～118回大学共同セミナー，第2回大学院共同セミナー，第2～3回大学合同セミナー，第8回国際学生セミナー)

【② 学科別参加者数】

Table with 5 columns: 区分, 男, 女, 合計, 比率(%). Rows include 文・史・哲・教・育・心, 法・商・社・国, 理・工・農・医, and 合 計.

【① 大学別参加者数】

Table with 4 columns: 大学区分, 男, 女, 総合計. Rows list various universities like 東 京 大, 京 大, 慶 応 大, etc., and include sub-totals for 国立小計, 公立小計, and 私立小計.

【③ 学年別参加者数】

Table with 5 columns: 区 分, 男, 女, 合計, 比率(%). Rows are numbered 1 through 6, representing different years or groups.

(注) ( )内は内数で大学合同セミナー参加者

◆ 千人会

57年4～5月

◇ 現在会員は一、六六一名です

大学人 一、二四五名  
社会人 二、四一六名

◇ 新しく会員となられた方々

四名(第64回報告(申込順))  
杏林大学教授 相沢 忠一殿  
B 玉川大学助教授 甲斐 隆殿  
A 二創設計代表取締役 菅谷芳雄殿  
C 無職 福田延衛殿

◇ 会費ありがとうございました。  
小林保彦、相沢忠一、吉沢四郎、  
佐藤慶幸、池宮英才、北裏喜一郎、  
内藤博、小原啓義、館逸雄、小泉  
文夫、渋谷光世、若林玄修、大槻  
盛一、山元洋、石渡毅、村上千賀  
子、木村尚三郎、佐藤進林邦夫、  
中島康孝、原一雄、木田宏、小幡  
史朗、佐藤和男、小川正浩、江  
浩美、高峯一愚、鈴木友二、安藤  
賢一、村田和巳、越智昇、豊嶋  
司、堤彰、塩田庄兵衛、石弘光、  
龍池隆、古屋健三、村上正夫、関  
根隆光、染谷恭次郎、村田勝彦、  
海老根宏、長里静子、大友昌子、  
水野弘文、宮崎照子、堀野定雄、  
伊藤意智郎、前田愛、村山松雄、  
小倉芳彦、清水雄二、工藤康雄、  
横山定雄、佐藤経明、石坂敏、清  
水昭次、伊倉退蔵、石坂敏、青原  
清明、小原清成、手塚喬介、松本  
秀一、羽田三郎、狩野紀昭、矢野  
洋四郎、鈴木達雄、下森定、谷口  
汎邦、井上宇市、桐生富久、小菅  
東洋、大原栄一、都留春夫、平山  
美枝子、向山文雄、下出積興、福  
田一郎、高木健太郎、山崎邦彦、  
細谷千博、金子六郎、前島郁雄、  
馬場伸也、大川郁子、芳賀徹、中

村英雄、富山芳正、尾田綾子、北  
野弘久、木原太郎、大塚博、木島  
康彦、大塚久雄、原治、本明寛、  
木村増三、鐘ヶ江信光、伊藤喜栄、  
安藤利亮、岩下秀男、正田亘、川  
口弘、峰岸純夫、鈴木佛二、赤撰  
也、奥野忠一、本吉修二、村田喜  
代治、平野文彦、佐伯彰一、梅沢  
文輔、関口富彦、加藤秀俊、荒井  
献、椿弘次、沢島侑子、野間三郎、  
羽田新、内田祥哉、古西信夫、水  
谷真智子、中岡保、舛洲照範、関  
口忠、後藤捨男、安芸皎一、加藤  
一郎、内田市五郎、小泉一郎、吉  
利喜美、児玉昭太郎、阪本泉、佐  
藤正喜、大籠まり子、鈴木二郎、  
中川作一、角田稔、木村健二郎、  
今井栄、竹内昭夫、天城勲、千野  
熊男、二宮永蔵、岡田純一、奥山  
典生、有賀弘、近藤裕、高柳暁、  
岩崎英二郎、栗田見瑞、勝田有恒、  
竹村猛、岡田己代次、深海博明、  
長岩寛、川名明、川添奈津子、原  
豊、近藤正夫、芹沢栄、柴垣和三  
雄、崎田直次、徳永勇雄、高橋和  
之、福田延衛、竹内喜代司 以上  
(敬称略)

● 寄付金報告

57年4～5月

△ 教育プログラム資金 △  
10,000円 第119回大学共同セミナ

15,721円 第119回大学共同セミナ

10,000円 1 指導教授殿

10,000円 1 参加者一同殿

6,000円 新歓実行委員会殿

6,000円 文京女子短期大学

八植樹 新入生セミナー殿  
ケヤキ三本 東海大学医学部  
新入生研修会殿

法人セミナー

理事長に中川秀恭氏が就任

茅・川喜田氏らの退任をうけて

別掲のごとく去る5月31日の第50回理事会において、任期満了に伴う役員改選が行なわれ、茅誠司理事長に代わり、現館長中川秀恭氏が7月1日より理事長に就任し、同時に館長をも兼務することになった。また、常務理事も川喜田愛郎、戸田修三の両氏が退任、今まで運営委員会委員として理事長の補佐役をつとめてきた三宅彰、鈴木皇、崎田直次の三氏が新たに常務理事に就任、再任された村井資長、中村哲、永井道雄の三理事と協力して理事長を助けることになった。

第50回理事会・第31回評議員会

昭和57年5月31日 銀行倶楽部

〔出席者〕

茅誠司、村井資長、中村哲、川喜田愛郎、中川秀恭、飯田宗一郎、小谷正雄、楠川絢一、岡山猛

〔監事〕平島正喜、隅谷三喜男、川原栄峰、村山松雄

御挨拶



中川 秀恭

この度はからず茅誠司先生のあとを受けて、大学セミナー・ハウス理事に就任することとなった。その責任の重大さを思うとき、おそれおののきを禁じることができない。

願われれば、昨56年2月、当時兼任しておられた館長の職責を茅先生に代わってお引き受けして以来、一年半の年月が経過した。その間、ハウスの運営・活動について如何ほどか学ぶことができたの

新執行部体制決まる

部がハウス当面の諸課題に積極的

で、その経験をもととして、歴代の理事長、顧問、飯田宗一郎名誉館長、理事・評議員の方々、協力会員校の代表者各位、教授の方々の御理解と御支援をたよりとして、職責を全うしたいと願う次第である。同時に、ハウスの職員御一同の協力とはげましとを切に御願いしたい。

昭和56年度経常部収支計算書 (56.4.1~57.3.31)

1. 収支計算の部

Table with 4 columns: 収入の部 (Income), 支出の部 (Expenditure), 科目 (Item), 金額 (Amount). Includes rows for basic assets, business income, dormitory, etc.

2. 正味財産増減計算の部

Table with 4 columns: 増加の部 (Increase), 減少の部 (Decrease), 科目 (Item), 金額 (Amount). Includes rows for asset increase, liability decrease, etc.

昭和57年度経常部収支計算書 (57.4.1~58.3.31)

Table with 4 columns: 収入の部 (Income), 支出の部 (Expenditure), 科目 (Item), 金額 (Amount). Includes rows for basic assets, business income, dormitory, etc.

伏見康治、松田武彦、鈴木幸寿、青木生子、大東百合子、渡辺輝雄、木下是雄、岡茂男、安藤良雄 委任状による者 理事一名、評議員六五名

昭和56年度事業報告案

具体的には別掲の「教育プログラム白書」と「業務白書」および「収支計算書」に大略記すとおりである。

56年度も協力会員校を中心とす

る利用者各位の支持、協力によって必要経費をまかない、健全な財務内容を報告しうることを喜びとしたい。ただ、募金計画・賛助会員制については昨年度にひきつづき今年度も実現の緒につくに至らなかったことに対しては遺憾に思うところの岡山専務理事の意思表明と事情説明が行なわれた。これにつき監事からは「会計面に問題はなく、正確かつ厳正な内容と判断する。業務面についても昨年に比べかなり改善されている。募金、利用促進に一段の努力が望ましい」との監査報告がなされた。なお審議の過程で、会員校会員制度と利用状況のより前進的な改善を求める意見も出され、常務理事会にその検討がゆだねられた。

▼寄付行為の一部変更に関する件  
会員校の増加に即応して左記のとおり理事および評議員の定数をふやしたい、なお本件決議後、文

部の承認を得たい旨の提案に対し、一部に慎重論、反対論も出たが、賛成多数で承認可決。  
(第14条)「理事20名以上25名以内」を「理事20名以上28名以内」に  
(第20条)「評議員60名以上100名以内」を「評議員60名以上120名以内」に

▼評議員人事案  
協力会員校の加入・脱退および学長交替等に伴い次の評議員人事案が承認可決された。  
東京医科大学長大高裕一氏、帝京大学長沖永莊一氏の新任、元神奈川大学長山辺武郎氏、東京家政学院大学長有光次郎氏の退任、電気通信大学長田中榮氏の新任(平島正喜氏の退任)、出光興産相談役石田正実氏、千葉大学名誉教授川喜田愛郎氏の退任。

▼協力会員校の加入・脱退に関する件  
東京医科大学、帝京大学計2校の加入、神奈川大学、東京家政学院大学計2校の脱会を承認可決。  
▼準協力会員校より評議員選出に関する件  
今後、準協力会員校からも適宜代表として評議員を選出することとし、今回現に準協力会員校に加入の五短大のうち恵泉女学園と白梅学園の秋田稔、細谷俊夫両学長を評議員に選出したい旨の提案を承認可決。

▼役員・顧問人事案  
同じく来る6月6日をもって任期満了になる役員等の人事に関して、次の理事長提案が承認可決された。  
国際基督教大学教授三宅彰氏、上智大学教授鈴木皇氏、中央大学

教授崎田直次氏、東京工業大学長松田武彦氏、日本大学総長鈴木勝氏、専修大学総長相馬勝夫氏の理事就任(後日鈴木、相馬両氏からは交渉の結果、辞退された。)と、日本女子大学名誉教授上代タノ氏(死去)、千葉大学名誉教授川喜田愛郎氏、東京大学教授加藤一郎氏、東京都立大学名誉教授沼田稲次郎氏、中央大学教授戸田修三氏、東京工業大学名誉教授齋藤進六氏の理事退任、退任理事六名を除く一八名の理事再任。  
東京外国語大学長鈴木幸寿氏の監事就任、前電気通信大学長平島正喜氏の監事退任、東京女子大学長隅谷三喜男氏の監事再任。  
また、理事退任の川喜田愛郎氏を顧問に推挙することが承認可決された。

▼理事長・館長・専務理事・常務理事人事案  
理事長より今回の任期満了を

期に退任、後任理事長を選任したい旨の発言があり、全員の賛成を得て、次期理事長に中川秀恭現館長を指名推薦した。これに対し、中川氏は本年7月1日より就任を承諾、それまでは茅氏が引き続き理事長としての職務を行なうことに決まった。  
さらに茅理事長より館長以下の人事につき次の提案がなされ、賛成多数で承認可決。また、新常務理事会において必要と認められた場合は常務理事若干名の追加決定を常務理事会に一任されたい旨の理事長提案が承認された。

館長 中川秀恭(兼務、再任)  
専務理事 岡山猛(再任)  
常務理事 村井資長(再任)  
同 中井道雄(再任)  
同 永井哲(再任)  
同 三宅彰(新任)  
同 鈴木皇(新任)  
同 崎田直次(新任)

事業部だより

57年4・5月

若葉のキャンパスから

●4・5両月の概況

当ハウスは今年も、春休み明け直前に集中する各大学の合宿の賑わいの中で、新年度4月を迎えた。そして、早くも4月3日の週末には、お隣り東京薬科大が「新入生歓迎キャンプ」を実施して、例年より早い新入生合宿シーズンの幕開けとなった。以後、各大学

の学部、学科ないしクラス単位のオリエンテーションがほとんど連日のように展開され、青葉若葉のこの丘は、若人の生気に溢れた。

同延人数に占める会員校の比率は七〇％におよぶが、これは会員校七大学のオリエンテーションでの利用が多かったためである。5月はグループ数九六、宿泊延人数五、七〇〇人(定員比六八〇％)で、これも5月の最多記録。会員校の利用は五七％である。

関係の利用は、計二八校、四四〇

昭和57年4・5月 新入生オリエンテーション実施状況

大 学 名	参加者数
● 4 月	
東京薬科大(新入生歓迎キャンプ)	*215 (一)
東海大・医学部	*148 (17)
東海大・医療技術短大	*197 (23)
学習院女子短大・国文学専攻	158 (8)
立教大・観光学科	182 (10)
杏林大・医学部	**119 (9)
日本女子大・社会福祉学科	122 (9)
東京家政大	201 (36)
工学院大・工業化学科	167 (22)
津田塾大・英文学科	301 (19)
中央大・心理学科	47 (1)
慶応義塾大・国際センター(留学生)	65 (13)
杏林大・保健学部	*120 (8)
東京農工大・農工学科	34 (6)
電気通信大・電波通信学科	67 (10)
中央大・教育学研究室	71 (7)
● 5 月	
東京学芸大・幼稚園教育学科	39 (4)
東京都立工科短大・機械工学科	43 (8)
東京都立工科短大・精密機械工学科	32 (9)
東京学芸大・理科教育教室	17 (2)
東京学芸大・化学教室	49 (4)
東京学芸大・物理教室	36 (4)
東京都立商科短大・経営学科	104 (13)
中央大・心理学会	50 (一)
東京都立立川短大	109 (21)
東京都立商科短大・商学科	143 (14)
東京都立商科短大・商学科	143 (13)
津田塾大・国際関係学科	261 (25)
東京都立商科短大・商学科	83 (9)
横浜国立大・教育学部	102 (5)
東京学芸大・生物学教室	65 (12)
文京女子短大・英語英文学科	214 (9)
文京女子短大・英語英文学科	221 (11)
職業訓練大学校	233 (42)
京浜女子大・食物栄養学科(全学セミナー)	113 (11)
日本女子大・家政経済学科	95 (8)
武蔵工業大・電子通信工学科	161 (12)
文教大女子短大部・英語英文学科	*197 (17)
東京都立大・数学科	79 (11)
東京都立大・化学科	91 (12)
計 40 グ ル ー プ	4,894人 (474人)

(注) 専修学校・各種学校を除く。参加者数の( )内は内数で教職員。\*\*は3泊、\*は2泊、他は1泊。実施順。



今日ほど医療が社会的批判の対象となった時代はなかったと思う。その実態は何であれ、まず謙虚に耳を傾け、反省の糧とせねばならぬが、見方を変えれば、今日ほど医療に大きな期待が寄せられてゐる時代はないということもなる。それらの期待にこたへる途は、医の倫理の確立とその実践以外にはない。

わが医学部と医療技術短期大学では、開学以来、毎年新入生に対する最初の授業として、学生と先生の泊り込みの研修会を開いてきた。しかし研修会という言葉の醸し出すニュアンスは不評を買ひ、大多数の新入生に毛嫌いされた。

第一日目の最初の会合の席で見受ける学生の顔には、若干の不安と、潜んだ反抗心から強いて無関心を装う様子が読み取れる。しかし二泊三泊の帰りに際しては、大学生活への希望と、友人先輩先生たちとの交流の糸口を見出した喜びを

二番めには、さる国立青年の家を利用した。ここには素直しく整備された宿舎も体育館もあったが、建物を守るルールのみが満ち溢れ、人を育てるルールは見出せず、ただ国費の乱費のみを学んで一年で止めた。

三番めがここ八王子であった。実のところ、この生活ほど厳しいものはないと思う。それはここには禁止条例がないからである。禁止のない禁止は厳しいが、これこそわれわれの望むところ、いつしか八王子を利用することが定例化し、ここに在る適度な不自由さと、適度な文化性が、いつしか皆の心に定着したのである。

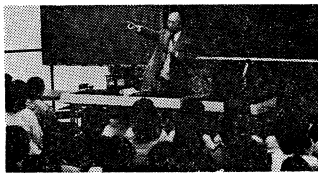
われわれが、このセミナー・ハウスの生活で学生に教え、かつ期待するものは自己制御 self control ということである。医療の場において、医師と患者の関係は、一対一の人間関係であって、そこでは医師は孤独であり、自ら最終判断をせねばならぬ。右するも左

●新入生合宿、両月の話題から  
この春も新入生合宿の皮切りは、前記のとおり、東京薬科大。『新歓祭』実行委員会を中心とするも自己の判断であり、その成否は、患者の生命を左右する。この瞬間の姿は正に自己制御そのものである。すなわち自己を知り、自己を愛し、自己を尊ぶ心こそ、他を愛し、他を尊ぶことができ、この愛の心が医の本質でなければならぬ。

しかしこれが遠く、高い願いであることは、セミナー・ハウスの図書館の入口に掲げられてゐる *vita brevis, ars longa*... という彼の医聖ヒポクラテスの教えが静かに示してくれている。

新入生の研修会ということは、ハウス設立の本来の目的からいささか次元の低い仕事かも知れないが、できることならば、もう少し運動施設を作っておきたい。夜も更け、師と学生がその出会いを大切に語り明かしている時、いつしか時の経つのを忘れ、つい大声になることもあるが、新しい人生の夢を求め人々のために時にはお目こぼしも願いたい。お願いついでに、残していただきたいものが二つある。一つは八王子の自然である。広さと緑と太陽を残してほしい。二つ目は人の心である。われわれが朝夕最も身近に接するのは食堂の従業員の方であるが、その温かい思い遣りの心と、きびきびした仕事ぶりは、いつも学生に教える大切な教材であることも申し添えたい。

(佐々木教授の短上写真Ⅱは現在(同大医療技術短期大学長を兼任)



“自己制御”を学ぶ  
医の道への第一歩

東海大学 医学部 教授 佐々木正五

◆わたしたちの合宿◆  
ループ、五、二、六九名(うち教職員四九四名)、延べ六、三三四名。これは同期間の全宿泊者の五四％に当たる。なお、大学関係のオリ

エンターションでクラス単位以上の合宿の実施状況は別表のとおりである。

九九％の者が抱いているのが常である。

研修会の在り方を振り返ってみるに、最初は大井川上流の過疎の村に在る廃校になった小学校に舎を借り、板の間に畳を敷いて泊まった。ここでは徹底的に文化とは隔離され、温かい人々の心に触れることができ、受験に疲れた学生にとってこの上なき環境であったが、何といつても距離的に遠過ぎた。

九〇％の者が抱いているのが常である。

研修会の在り方を振り返ってみるに、最初は大井川上流の過疎の村に在る廃校になった小学校に舎を借り、板の間に畳を敷いて泊まった。ここでは徹底的に文化とは隔離され、温かい人々の心に触れることができ、受験に疲れた学生にとってこの上なき環境であったが、何といつても距離的に遠過ぎた。

●新入生合宿、両月の話題から  
この春も新入生合宿の皮切りは、前記のとおり、東京薬科大。『新歓祭』実行委員会を中心とするも自己の判断であり、その成否は、患者の生命を左右する。この瞬間の姿は正に自己制御そのものである。すなわち自己を知り、自己を愛し、自己を尊ぶ心こそ、他を愛し、他を尊ぶことができ、この愛の心が医の本質でなければならぬ。

しかしこれが遠く、高い願いであることは、セミナー・ハウスの図書館の入口に掲げられてゐる *vita brevis, ars longa*... という彼の医聖ヒポクラテスの教えが静かに示してくれている。

新入生の研修会ということは、ハウス設立の本来の目的からいささか次元の低い仕事かも知れないが、できることならば、もう少し運動施設を作っておきたい。夜も更け、師と学生がその出会いを大切に語り明かしている時、いつしか時の経つのを忘れ、つい大声になることもあるが、新しい人生の夢を求め人々のために時にはお目こぼしも願いたい。お願いついでに、残していただきたいものが二つある。一つは八王子の自然である。広さと緑と太陽を残してほしい。二つ目は人の心である。われわれが朝夕最も身近に接するのは食堂の従業員の方であるが、その温かい思い遣りの心と、きびきびした仕事ぶりは、いつも学生に教える大切な教材であることも申し添えたい。

(佐々木教授の短上写真Ⅱは現在(同大医療技術短期大学長を兼任)

東海大学医学部新入生研修会\* 日程表

	4月5日(月)	4月6日(火)	4月7日(水)
7		起床 掃除	起床 掃除
8		朝食(食堂)	朝食(食堂)
9		基礎学力テスト(講堂)	基礎学力テスト(講堂)
10	全体ガイダンス (湘南校舎2S11教室)	講演(講堂) 「人の一生」講師:相澤豊三	論評・まとめ(講堂)
11	湘南校舎南門集合 出発	昼食(食堂)	記念植樹
12	伊勢原校舎経由 バス移動 八王子・到着	病院長講演(講堂) 「成人病の子防」	現地解散
13	研修会オリエンテーション	レクリエーション	
14	新入生勧誘 オリエンテーション (講堂)		
15	夕食(食堂)	夕食(食堂)	
16	医学部長講演(講堂) 「学生生活とスポーツ」	教授を囲んで フリートーク(講堂)	
17	討論	研修会感想文作成(講堂)	
18	懇話会別懇談会** (懇話会教員室)	懇親会 (交友館)	
19			
20			
21			
22			
23	消灯	消灯	

\* 研修会目的  
教員と学生の共同生活、体験を通じて相互の交流を深めるとともに、医学生としていかにあるべきかを明確にする。

\*\* 懇談会  
本学部では学生15名前後に1名の教授(または助教)が配属されて懇話会を作り、学業以外の諸事の相談、指導を担当する制度があり、研修会も懇話会単位に編成されている。

在校生が、入学前に新入生を迎え、相互交流の中で新入生の大学生活への導入を助けようとするもの。双方合わせて二一五名、今年も学生だけの自主管理で、規律ある二泊の合宿を行なった。

次いで、東海大医学部の一四八名が、大学での入学式の翌日にバスを連ねて来館、二泊三日の「新入生研修会」(別掲日程表参照)を実施した。当ハウスでの開催は昭和51年以来連続の七年め。今年も佐々木正五医学部長、五島雄一郎病院長を中心に、教職員・在校生・新入生が文字どおり一体となって成果を上げた。医学部と入れ替わりに到着したのは東海大医療技

術短大の一九七名。同短大の学長を兼務される佐々木医学部長は、医の道に進む両グループの若者たちに、今年もまた当ハウスでの生活のあり方とその意味について語りかけて下さった。後日同医学部長より寄せられた一文を、本号の「わたしたちの合宿」欄に掲載させていただきます。

日本女子大社会福祉学科は一三年め。このほか当ハウスでの開催が一〇回以上というオリエンテーションが少なくない。昨年一〇年ぶりに復活した津田塾大の英文、国際関係両学科のフレッシュマ

(10ページ3段めへつづく)

昭和56年度 業務 白書

●年間利用者五万四、五四七人

今年度は利用料金を据え置くかわりに利用者増をはかり、会員校会費の増額と相まって、支出増をまかなおうという当初の目標を達成しえたことを喜ぶとともに、会員校をはじめとする利用者各位のご支援とご協力で感謝したい。

開館以来の延総利用者数は、この結果六八万二、八五六人となった。

●利用者の種別、利用の状態

表1に示すとおり、会員校の占める率が初めて五〇%をこえた。今年度から利用校常連の一部、五短大が準協力会員校制の発足と共に会員校に加わったことにもよるが、うれしいことである。

会員校、非会員校とも、利用の大半は教授と学生のゼミ合宿だが春季の新生オリエンテーションは年々その数を増し、その内容も工夫、充実されていることはすでに本紙上に報じたとおりである。また各種の研修、学会、国際集会なども、熱心な利用実績をあげている。

中でも今年度は7・8月の海外日本語講師研修会(六九名)、ノースカロライナ日本センター教授団(二二名)、2・3月の中国日本語講師研修会(一四二名)がそれぞれ外務省、国際交流基金などの肝入りで一日ないし一カ月の研修合宿を当ハウスで行なったことは、国際交流を事業目標の一つにかかげるハウスにとり貴重な体験であり励みであった。ゼミ泊日数別の統計によると、ゼミ回数では一泊、二泊のものが圧倒的に多く、平均宿泊日数一・七二泊と、ここ数年ほとんど変わらない数字を示している。

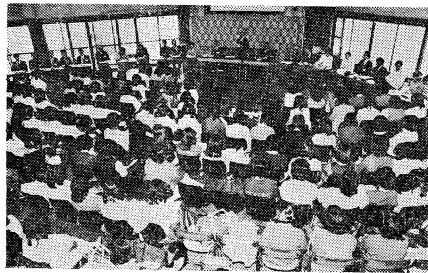
協力会員校五五大学中、利用の状況を示したのが表3である。当ハウスの利用者が年間宿泊延人数とはいえ、在籍学生の一〇%をこえる大学が一三校を数えるのはうれしいが、このほかの会員校にも、自分たち共同の施設という親しみから、もっと気軽に、ひろく利用していただきたいというのが、ハウスの願いである。

〈表1〉 利用者別宿泊人数・ゼミ回数 ( )内は前年度数

	ゼミ回数	比率(%)	宿泊延人数(人)	比率(%)	1団体平均実人数
会 員 校	694 ( 720)	59.5	28,527 (26,329)	51.3	26 (22)
非 会 員 校	181 ( 162)	15.5	6,885 ( 7,068)	12.4	25 (28)
大 学 連 合	39 ( 34)	3.3	5,363 ( 4,047)	9.6	52 (47)
学 会 ・ 教 育 団 体	62 ( 90)	5.3	6,842 ( 9,162)	12.3	46 (51)
社 会 人 団 体	191 ( 181)	16.4	6,930 ( 9,002)	12.4	24 (30)
合 計	1,167 (1,187)	100	54,547 (55,608)	100	27 (27)

(9ページからつづく)

ン・キャンプは、今年も再現され、最終日には、昨年同様大東百合子学長を囲む昼食パーティが食堂いっぱいになり広がられた。今年度は英文学科の参加者が教職員を含めて三〇〇人を超え、学生の一部が構内の民家・遠来荘に宿泊するという異例の大合宿となった。立教大観光学科のオリエンテーションは一〇年ぶりのカム・バック、日本女子大家政経済学科は三年ぶり五回目の開催。今年度四年めの慶大国際センターの新入学留学生のオリエンテーションでは、六ヶ国・二二名の外国人留学生が日本人学生と教職員計四四名との交わりを深めた。



東京家政大学——はじめてのフレッシュマン・セミナー (開講式で挨拶する津郷学長)

館、他大学の過去の資料を参考にされるなど、長期間にわたって意欲的に準備を進めてこられた。当日は好天にも恵まれ、日曜にもかかわらず津郷友吉学長はじめ教職員三六名、新生一五六五名が朝から続々とこの丘に参集、開講式(上掲写真)にのぞんだ。会員校一〇年めの東京家政大のこの新企画の実現は、当ハウスにとってもまことに喜ばしい出来事であった。

●キャンパス点描  
4月7日 東海大医学部が新生入生研修会の最終日に恒例の植樹祭。教職員と新生入生全員が次々とスコップを手にして、持参のケヤキ三株を長期セミナー館横に記念の植樹。

4月17日 夕食時に中大、成蹊大、東大、計約一〇〇名の「先輩」が、日女大社会学科の新生入生一、二名の食堂への「入場」を拍手で迎えた後、同三グループの代表がそれぞれ歓迎の言葉をのべ、新生代表もこれに応えた。最後に成蹊大・宇野重昭教授(当ハウス運営委員)があいさつをされ、和氣に満ちた歓迎と交流の一時となった。

5月22日 夕食時に第119回共同セミナーを含む五グループ(二十数大学)二一三名が交流。特に日女大家政経済学科の新生入生九五名を歓迎。共同セミナー委員の一橋大・阿部謙也教授がスピーチ。

●新生生のことばから  
「巨大な大学に一人入学した時に不安を感じていた。このまま過ぎていたら私もきっと「五月病」にかかっていただろう。このオリエンテーション合宿のおかげで、中学以来感じつけていた、そして入学式後授業開始日にも感じたあの通夜のような暗い雰囲気を取り消された」

「このフレッシュマン・キャンプで得たものといえば、第一に出逢いだと思う。まだ友達たちという

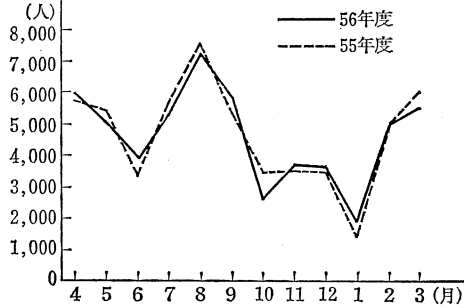
ほど親しくはなっていないが、実のところ顔も知らなかった人たちと話すことができた。内容はたいてい新しいものであったが、この出逢いを機に、今まで気恥ずかしくて挨拶できなかった人たちにも「おはよう」という声をかけられそう

「毎日車の通る自然破壊の町の中で暮らしている私にとっては、この自然の中で暮らせることは夢のようだった。車でせわめく中と違って夜が長いには驚いた。キャンプファイアーなどもできて楽しかった」「自然あつての人間である意味を、この自然豊かな環境で感じる事ができた」

<表2> 月別利用状況 ( )内は前年度数

月	ゼミ回数	宿泊延人数	定員比 (%)
4	106	5,919 ( 5,797)	73.1 (71.6)
5	94	5,163 ( 5,365)	63.7 (64.1)
6	76	3,604 ( 3,377)	47.7 (46.3)
7	100	5,253 ( 5,553)	62.8 (66.3)
8	116	7,268 ( 7,733)	86.8 (92.4)
9	132	5,588 ( 5,285)	69.0 (65.2)
10	67	2,654 ( 3,542)	31.7 (42.3)
11	93	3,550 ( 3,491)	43.8 (43.1)
12	108	3,594 ( 3,482)	49.3 (47.8)
1	49	1,619 ( 1,373)	22.2 (18.8)
2	101	4,792 ( 4,738)	63.4 (62.7)
3	124	5,543 ( 5,872)	66.2 (70.2)
計	1,166	54,547 (55,608)	
月平均	97	4,546 ( 4,634)	57.1 (58.2)
1日平均	3	151 ( 154)	

<図1> 宿泊延人数の変動 (昭和55~56年度)



●年間 宿舎利用率は五七・一%  
 図1および表2でご覧のとおり当ハウスの利用状況は月によって大きく変動する。大学共通の特殊事情からのこうした変動の波をいかに調整して全体としての利用率を高めるかが当面の課題になって

いる。利用の少ない月の利用と、週末以外の空いた平日の利用を、各方面にすすめていきたい。

それと同時に、ハウス内のさまざまな施設や宿舎のより有効な利用、それぞれの特性をもち味を生かした使い方をすすめてほしい。用い方によってはたいへん楽しい研修や合宿ができる。国際セミナー館や長期セミナー館、純日本風の民家と庭のたまたまいを楽しめる遠来荘など、より一層の利用が待たれる。

●利用者のための交歓プログラム  
 週末の夕食時など、食堂などで催す各大学の交歓会が、越えての交歓会が、当ハウスならではの行事として喜ばれている。国籍を越えた交流風景がごく自然に展かれるのも楽しい経験である。今年度は年間三九回のプログラムが実施さ

<表3> 会員校利用状況

順位	校名	ゼミ回数	順位	校名	宿泊延人数	順位	校名	在籍学生100人当たり宿泊延人数
1	東大	60	1	中央大	1,901	1	東大	60.0
2	京大	55	2	早稲大	1,769	2	立大	39.4
3	早稲大	53	3	東大	1,655	3	お茶大	28.3
4	早稲大	38	4	立大	1,080	4	東大	23.6
5	東大	32	5	立大	1,053	5	東大	18.7
6	慶大	31	6	駒大	1,038	6	東大	17.9
7	慶大	29	7	東大	1,027	7	順天大	17.3
8	山学	28	8	青大	971	8	中央大	17.0
9	明大	27	9	青大	917	9	武蔵大	14.6
10	明大	27	10	東大	886	10	電大	13.4
11	立大	20	11	慶大	853	11	国際大	13.0
12	立大	17	12	立大	664	12	国大	11.2
13	立大	17	13	東大	655	13	学大	10.3
14	立大	15	14	武蔵大	554	14	武蔵大	9.8
14	立大	15	15	成蹊大	523	15	成蹊大	8.5

(注) 1.本表には準協力会員校は含まない。2.本表には通信教育スクーリング学生の宿泊数は含まない。

●利用状況

\* 同月2回利用  
\* 同月3回利用  
日帰り利用者を除く

- 4月 (95グループ、延五、九五七名)
- 慶応義塾大学教授 松本 三郎
  - 早稲田大学助教授 早川 弘道
  - 中央大学教授 森松 健介
  - 青山学院大学助教授 羽田 保彦
  - 青山学院大学助教授 小林 三郎

- 学習院大学教授 宇津木 保
- 東海大学教授 鈴木 守
- 相模女子大学教授 巻 正平
- 法政大学教授 角瀬 保雄
- 明治大学助教授 高木 仁
- 慶応義塾大学助教授 川合 隆男
- 早稲田大学助教授 市川 孝正
- 東京学芸大学講師 木村 茂光
- 東京学芸大学助教授 山田 有策
- 東京大学助教授 山本 泰
- 東京薬科大学新入生歓迎会 西野 万里
- 明大体育会ワンダーフォーゲル部 設楽 正雄
- 明治大学教授 西野 万里
- 明治大学教授 田島 恵児
- 青山学院大学教授 川口 弘
- 中央大学教授 谷敷 正光
- 東海大学医学部新入生研修会 谷敷 正光
- 駒沢大学助教授 谷敷 正光
- 東海大学医療技術短期大学新入生オリエンテーション 横田 信武
- 早稲田大学助教授 森田 明
- お茶の水女子大学助教授 森田 明
- 立正大学助教授 松浦 浩司
- 東京理科大学人間関係ゼミ 松浦 浩司
- 津田塾大学講師 長岡 亮介
- 立教大学観光学科新入生オリエンテーション 長岡 亮介
- 中央大学教授 池上 一志
- 明治大学教授 寺田 義行
- 筑波大学教務部新入生宿泊セミナー 松浦 浩司
- 杏林大学教授 小森 弥六
- 明治学院大学教授 秋山 智久
- 東京大学教養学科学部自治会 秋山 智久
- 日本女子大学社会学部一年次オリエンテーション 木島 淑孝
- 中央大学助教授 木島 淑孝
- 成蹊大学助教授 宇野 重昭
- 東京薬科大学助教授 坂元 忠芳
- 東京家政大学フレッシュユマン・セミナー 坂元 忠芳

- 5月29日 日本ワイルド協会がイギリスの著名な映画演劇学者ロジャー・マンベール博士(ポストン大教授)夫妻を迎え、初の国際セミナーを開催。学習院大・荒井良雄、明星大・井村君臣教授などオスカー・ワイルド文学研究者約四〇名が参集。初日の夜は本邦初公開という映画「まじめが大切」の鑑賞、講演と討論のあと、交友館で懇親のパーティ。飯田名誉館長、シェリー酒で歓待。
- 工学院大学工業化学科新入生オリエンテーション 師岡 孝次
  - 津田塾大学英文学科フレッシュユマン・キャンパ 伊藤 玄三
  - 東海大学教授 伊藤 玄三
  - 国際基督教大ICU学生セミナー 伊藤 玄三
  - 法政大学助教授 伊藤 玄三
  - 中央大学助教授 伊藤 玄三
  - 慶応義塾大国際センター(留学生オリエンテーション・キャンパ) 伊藤 玄三
  - 早稲田大学講師 相田 武文
  - 成蹊大学助教授 肥後 和夫
  - 杏林大学保健学部フレッシュユマン・キャンパ 肥後 和夫
  - 東京農工大学農業工学科新入生合宿オリエンテーション 肥後 和夫
  - 電気通信大学電波通信学科新入生研修 肥後 和夫
  - 中央大学教育学研究室新入生オリエンテーション 肥後 和夫
  - 青山学院大青山キリスト教学生会 菊地 敏夫
  - 芝浦工業大学助教授 菊地 敏夫
  - 日本大学助教授 堀野 定雄
  - 駒沢大学助教授 堀野 定雄
  - 神奈川大学助教授 堀野 定雄
  - 産業能率大学助教授 堀野 定雄
  - 独協女子短期大学文学専攻新入生ガイダンス 堀野 定雄

都留文科大助教 川上 則道  
横浜国立大教授 柳下 勇  
桜美林大短期大体育文化団体  
連合会

第3回大学院仏語セミナー  
多摩キリスト福音教会  
すみれ幼稚園

牛込独立キリスト教会  
ヒューマンエコロジ研究所  
第一弘報社

日本電気  
三和

日本電気コスト・コンサルティン  
グ\*

川鉄物産  
興亜火災海上保険\*

アスター精機  
日本水産

光印刷  
京王百貨店

能美防災\*  
住友電気工業

小西六写真工業

▼第9回国際学生セミナー

主題 発展と平和のモデルを求め  
て——日本再考——  
期日 昭和57年10月29～31日  
△ゲスト講演▽

国際関係における競争と協調  
特命全権大使 吉野文六氏  
△ゲスト——お話とスライド▽  
国際協力推進協会専務理事  
松本 洋氏

△セクション演習▽  
A日本の経済発展とその役割(南  
亮進氏)／Bアジアにおける貧困  
の構造(渡辺利夫氏)／C日本は  
いかなる点で世界一なのか?(D  
・ラミス氏)／D第三文化の日本  
人(菊地靖氏)／E日本民族の国  
際化(藤本芳男氏・横田洋三氏)

富士通\* 丸富百貨店  
〔個人利用〕  
上智大學生\*\* 福島 範昌  
青山学院大學生 塚本 哲司  
●5月 (96グループ、延五、七〇〇人)  
専修大教授 麻島 昭一  
日本大教授 成田 誠二  
早稲田大教授 森田 桐郎  
東京大教授 小林 晃  
立教大講師 小松 恒之  
芝浦工業大電算機研究会 松本 恒之  
東洋大教授 廣田 明  
法政大助教授 横山 定雄  
上智大体育会弓道部 横山 定雄  
武蔵大教授 三浦 武  
東京大物性研究所 大槻 健  
早稲田大教授 山下 幸夫  
中央大教授 北野 弘久  
日本大教授 山田 幸夫  
学習院大シエイクスピア劇研究会

△運営委員▽横田洋三、菊地靖、  
熊田慎宣、渡辺利夫の諸氏  
△募集人員▽日本人学生七〇名、  
留学生三〇名  
△締切日▽10月22日

▼第19回大教員懇談会  
主題 国際化時代の大学——教員  
と研究者を中心とした交流の現状  
と将来——  
期日 昭和57年10月2、3日  
△発題講演▽  
東京大教授 今道友信氏  
文部省学術国際局長 大崎仁氏  
△パネル発題者▽ホセ・ゼ・ペラ、  
アリフィン・ベイ、ハーバート・  
P・ビックス、蠟山道雄、前田  
渡、小林規威の諸氏

立正大助教授 川上 義夫  
立教大講師 疋田 康行  
東京学芸大幼稚園教育学科新入  
生オリエンテーション  
学習院大教授 河野 豊弘  
東京学芸大理科教育教室新入生  
合宿研修  
東京学芸大化学教室新入生合宿  
研修  
東京学芸大物理学教室新入生合  
宿研修  
青山学院大青山子ども会

東京農工大教授 金子 六郎  
駒沢大正課ゼミナル連合会  
駒沢大教授 齋藤 寿  
駒沢大教授 谷敷 正光  
津田塾大国際関係学科フレッシ  
ン・キャンプ  
横浜国立大教育学部新入生研修  
東京学芸大生物学教室新入生合  
宿研修  
芝浦工業大教授 高橋 清  
慶応義塾大教授 村井 実  
日本女子大家政経済学科一年次  
オリエンテーション  
青山学院大教授 原 豊  
武蔵工業大教育実習セミナー  
明治学院大教授 竹内 真一  
東京理科大学教授 富沢 稔  
法政大助教授 水野 節夫



食堂へ(本館のブリッジ)

慶応義塾大教授 伊藤 喜栄  
中央大「心理学」会新入生歓迎  
合宿  
東京農工大教授 金子 六郎  
駒沢大正課ゼミナル連合会  
駒沢大教授 齋藤 寿  
駒沢大教授 谷敷 正光  
津田塾大国際関係学科フレッシ  
ン・キャンプ  
横浜国立大教育学部新入生研修  
東京学芸大生物学教室新入生合  
宿研修  
芝浦工業大教授 高橋 清  
慶応義塾大教授 村井 実  
日本女子大家政経済学科一年次  
オリエンテーション  
青山学院大教授 原 豊  
武蔵工業大教育実習セミナー  
明治学院大教授 竹内 真一  
東京理科大学教授 富沢 稔  
法政大助教授 水野 節夫

武蔵工業大電子通信工学科新入  
生歓迎セミナー  
文教大女子短期大英語英文  
学科新入生オリエンテーション  
東京都立大数学科新入生オリエ  
ンテーション  
東京都立大化学科新入生オリエ  
ンテーション  
東京学芸大哲学教室合宿研修  
東京学芸大教授 内田 道雄  
法政大教授 五味 健吉  
日本大経済学部ゼミナル協議会  
埼玉大物理学科合宿研修  
文京女子短期大英語英文学科新  
入生セミナー\*  
神奈川大講師 深澤 俊昭  
東京コンピュータ学院新入生課  
外ゼミ  
都立工科短期大機械工学科・精  
密機械工学科新入生オリエンテ  
ーション  
都立商科短期大経営学科新入生  
オリエンテーション  
都立立川短期大新入生オリエン  
テーション  
都立商科短期大商学科新入生オ  
リエンテーション\*\*  
東邦大環境化学教室  
職業訓練大校新入生セミナー  
京浜女子大食物栄養学科全学セ  
ミナー  
桜美林大助教授 相馬 順一  
高千穂商科大学教授 石曾根孝輔  
東京文科アカデミー新入生合宿  
白百合学園高等学校修養会  
太極拳同好会大学連合  
箱根会(大会連合火山学研究集会)  
第19回大共同ゼミナー  
日本ワイルド協会国際ゼミナー  
東京ドイック文化センター  
国立療養所東京病院附属看護学校

国立西埼玉中央病院附属看護学校  
高橋聖書研究会  
興亜火災海上保険  
エム・エス計算センター  
ウチダコンピュータシステム  
富士電機製造  
三谷電子工業  
京王百貨店\*  
協和醸酵工業  
プルエシ工業  
〔個人利用〕  
早稲田大講師 嘉納 成男  
相模女子大教授 五十嵐良雄  
玉川大助教授 甲斐 隆  
上智大學生\* 福島 範昌  
東京家政学院大助教授 酒井 敏  
星を見るゼミ 江沢 洋

●編集後記  
本号では、昭和53年度の教育プ  
ログラム白書および業務白書を掲  
載した。一年間の活動の総括であ  
る。統計資料で見ると、大学共  
同セミナーの参加者は、近年、減  
少してきている。これには様々な  
要因があるが、参加者が企画を  
慎重に選んできているのは確かに  
ことである。  
本年度第1回に当たる第19回大  
学共同セミナーは、その意味で示  
唆的である。参加者の感想文三篇  
から、共同セミナーに託されてい  
るそれぞれの思いを伺うことがで  
きる。広い視野と高度な専門性を  
備えた共同セミナーを提供できる  
ことは、大学セミナー・ハウスの  
誇りである。  
関係者の声に支えられて、中川  
新理事長が生まれた。創設の心を  
土台とし、新鮮な感覚でこれから  
の法人に新しい道をつけられるこ  
とであろう。(能)